
Beast Tamer

T k

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B e a s t T a m e r

【Nコード】

N 4 0 1 0 P

【作者名】

T k

【あらすじ】

一条咲人は、ごく普通の大学生。

既に将来のことと決めて、平穏な生活を送るつもりだったのだが、そんな彼の人生設計は脆くも崩れ去る。

コンビニ歸りに襲ってきた謎の影。いつの間にか部屋に入ってきたメイドの少女、セレス。

幻獣と呼ばれる存在と、それと共闘する者幻獣使い。そして、彼らが討つべき存在である魔獣。

セレスのハイテンションなノリに振り回されながら、咲人は戦いに

巻き込まれていくことになる。

色々とポロリするシーンがあります。気分を害する可能性もあるので、ご注意ください。

ブローグ

一条咲人は、夜道を駆け抜けていた。

どれだけ走ったのだろうか。それさえも解らないほどに。携帯電話を取り出し時刻を確認したかったが、そんな余裕さえ彼には残されていなかった。

そもそも、こんなことになってしまった原因はなんなのか

確か、夕飯を作ろうと思ったら、冷蔵庫に何も食材が無かったために、コンビニに幕の内弁当とミルクティーという、気持ち悪い組み合わせを買いに行ったのが始まりだ。そして、ついでに秋の夜長のお供にエロ雑誌を買って、帰路についたのだ。

帰る途中で、同じアパートの一階に吉田さん（三十七歳・自宅警備員）が愛犬のジハード君 吉田さん曰く、漢字では聖戦と書くらしい を散歩していたので、挨拶をした。心の中で、「いい加減働けよ負け組が」とか、「ペットだからって中二病臭い名前をつけてんじゃねーよ」と突っ込みながら。

夜中の公園をショートカットのために突っ切り、途中でホームレスの説教に付き合わされそうになるのを振りきって、アパートの近くの道へと出た。彼に捕まれば、一時間も寒空の下でくだらない話を聞かされることになる。ギャンブルには興味ない。

それからだった。小さな小道に出て、アパート前の道に曲がろうとした時に、不意に襲われたのは。

それが何だったのかは、解らない。まさに、異形とも言うべき存在 それこそ、漫画や映画に出てくるようなモンスターを具現化したかのような

現実的に有り得ない。そんなものが、この地球に存在するわけがない。理系の人間ではないが、咲人は非科学的なことはあまり信じない性質であった。

そのようなタイプの人間は、いざ非現実的なことに直面すると、

冷静さを失う。たとえ、どれだけ図太い人間であつたとしてもだ。そして、それは時に、的確な判断力さえも奪う。

「くそつ、俺としたことが……！」

自分の判断ミスに、舌打ちをする。

行き止まりだ。普段の彼なら気付いていたのだが、逃げるのに必死で、袋小路に入り込んでしまったのだ。

どうする。どうすればいいんだ！？

そういえば、最近、この辺りで殺人事件が多発しているというニュースを聞いたばかりだ。だとすると、こいつがその犯人なのだろうか。

いや、そんなことは有り得ない。何故なら、今、自分に襲いかかっているそいつは、人のカタチをしていないからだ。

言葉で表現するとすれば、「不定形な黒い影」　それ以外の表現のしようがない。

コンビ二で買った幕の内弁当が偏ってしまっていたが、そんなことを気にしている余裕など無かった。どちらにしろ、賞味期限ギリギリの、二百五十円の売れ残りだ。重要なのは、この状況をどうすべきかだ。

後ろには壁、前には謎の黒い影。逃げ場はない。

このままでは、仕留められるだけだ。それならば、一か八か賭けてみるしかない。

唯一武器になりそうな、五〇〇mlのミルクティーのペットボトルを構える。自分でやってみて情けなくなるが、このままあの化物に食われるくらいならマシである。

そして

全身に走る衝撃。

咲人の意識は、そこで途絶えた。

第1話 朝起きたらメツチャ嘗められてました

とんでもない夢だった。

深淵から徐々に戻りつつある意識の中で、咲人はそう思った。

此処のところ、ゼミの課題を徹夜でやっているのが原因かもしれない。発表はまだずっと先のことだが、このような面倒なことは先に終わらせておけば、後が楽だからだ。勿論、小中学校の頃の夏休みの宿題も、七月中に終わらせていた。

しかし、何もかも追い込むのは、良くない。これから、程々にしておこう

「んっ、ご主人様……はあっ……んちゅっ……んふう……」

寒い。十月中旬に入り、そろそろＴシャツ一枚で寝るには厳しい季節になってきている。実家から冬着を送ってもらうべきか、それとも古着屋で良さそうなものを探すか

独り暮らしであまりお金に余裕が無いため、出来れば前者で済ませたかった。

「はあ……はあ……ご主人……さまあ……んっ……ああ……」

それにしても、何だったのだろうか。妙にリアルな夢だということとは覚えている。

食材を切らしていたために、コンビニ弁当で済ませるために駅前まで軽く走り、目当ての品物を買って帰る途中だ。ニートの吉田さんに挨拶して、道行く人を捕まえて説教するホームレスをやりすごして、その後に

謎のバケモノが、襲いかかってきたのだ。

途中までは、日常生活の一部のような夢であった。

そこからはただ、ひたすら逃げた。逃げて逃げて逃げまくった。しかし、袋小路に追い詰められて、そこで覚悟を決めて突貫して

「はあっ……はあっ……ご主人様っ……ご主人様あああっ……！」

ってか、さっきから聞こえてくる嬌声はなんなんだろう。それに、

首のあたりがくすぐつたい。

まさか、エッチなDVDを付けっぱなしで寝てしまったのだろうか、いやそんな筈はない。ブツは先輩に貸したまま、未だ帰ってき
ていない。

じゃあ、いったい何なんだろうか？

ゆっくりと目を開ける。

「.....は？」

最早、何が何だか分からなかった。

妙に重たいと思ったら、自分の腹の上に、女の子が馬乗りになっ
ていた。しかも、どういうわけなのか、妙に現実離れた。まず
は普通の生活をしていれば着ることが無いような服装だ。

暗めの色調のワンピースの上に、フリルが施されたエプロンを着
ている。頭の上には、同じようにフリルが施されたヘッドドレス。
俗に言う、メイドさんの格好である。

「あ、お気づきになれましたか、ご主人様」

「.....」

どうやら、まだ寝ぼけているらしい。

メイドを雇うほどの金など無い。一介の貧乏学生がアパートでメ
イドを雇うなんてことは有り得ない。コスプレはあまり興味が無い
やっぱり、致すなら普通が良い。というか、それ以前にカノジョ持
ちでもない。半年前に別れたばかりだ。

確かに人肌が恋しいと思う年頃ではあるが、此処まで貪欲だった
のか。少し、凹む。

ただ疲れているのだろう。今日は休みだから、もう少し寝ていよ
う。そう決めると、再び咲人は目をゆっくりと閉じた。が。

「もうっ！ ご主人様、二度寝しないで起きてくださいっ！」

自慢のマグナム44 もといアレ に凄まじい衝撃が走った。
「おぐおえあああああああああああああああああああああ
あああっ！」

痛いなんてもんじゃない。この表現しがたい激痛は、男にしか解

るまい。

咲人は下腹部を押さえこみながら、大声で絶叫してのたうち回った。

「な、な、何しやがる……この……野郎………あああああ………！」

最早、夢とか現実とか、そんなことはどうでもよかった。

とにかく、この痛みが早く収まってくれ。ってか、収まらないと死ぬ。普通に死ぬ。

効果があるのか解らないが、心の中で素数を数え、般若心経を唱える。そうでもしないと、やってられない。

「ん……待てよ……？」

痛いということは、これは紛れもない現実のことである。

見上げると、やはりメイド服を着た女の子が立っている。股間を押さえながら仰向けになるという情けない格好だが、この際仕方が無い。

「おはようございます、ご主人様」

メイド娘は腰の前で手を揃えて、ぺこりと頭を下げた。

「あ、ああ。おはよう　って、そうじゃねえっての！」

がばつと起き上がり、メイドの少女を見据える咲人。

改めて見てみると、とても可愛らしい少女だ。かなり小柄で、年齢は十四、五といったところか。顔には幼さがくつきりと残っており、日本人離れた金系のような輝きを放つ髪は、ポニーテールに結われている。

また、小柄な割に肉付きがよく、メイド服の上からでも大きめの胸が、その存在感を誇示している。成長が早いのか、元の素材が良いか

「だいたいお前誰なんだよ？　なぜに俺の部屋に上がってるわけ？」
他にも、なんで人の身体を舐めていたのかとか、股間を蹴り上げたのかとか、色々聞きたかった。

質問攻めにしたいという衝動を抑えて、まずは相手の素性を確か

めるべく、尋ねる。

すると、待つてましたと云わんばかりに、メイドは再びぺこりと頭を下げて、自己紹介を始めた。

「私は、^{ビーストテイマー}幻獣使い結社ユグドラシルより派遣されました、セレスと申します。ワーキャットの血を引いており」

何を言っているのかサツパリだった。

十四、五歳であろう年齢から推測すると、その手の病気が発症しちゃっている子なのかもしれない。アニメとかに感化されて、「わたしは異世界から来たお姫様なの」とか「静まれ、俺の腕よ……」とか言っちゃってるような。

自分に変な設定を付けて、カッコイイと思いたい年頃なのだろう。尤も、数年後に、柱に頭を打ちつけたくなるのは間違いないだろうが。実際、咲人も中学時代に同じような人物を見てきたが、その者達がろくな人生を歩んでいないことを知っている。

「……あのさ、悪いこと言わないから、そういうのは大人になってから恥ずかしい思いするから、やめておけ。恥ずかしさのあまり京東北線にダイブしようとしてそれ以来音信不通の河村君と、三十七歳にもなつて犬にジハードなんていう名前を付けている痛々しいオッサンを知っている」

中学時代の級友である音信不通の河村君と、一階の吉田さんを悪い例として挙げてしまったことを少し申し訳なく思いながらも、忠告をする咲人。

「はあ、俗に言う中二病という奴ですね。しかし、若いうちに発症しておかないと、後々発症した時に痛い目に遭いますよ。」

「ああ、俺はもう治ってる……と思う。あの頃は、校舎の窓ガラスを割ったり、盗んだバイクで走りだしたり、未成年なのに無理して煙草吸ったりしていたが。勿論、高校に入る前に更生したぞ。内申に響いたら、まずかったからな」

そう考えると説得力が無いのだが。

「それよりだ。そんな中二病がどうのこうのなんてどうでもいいん

だ。くだらねえ。だから、お前は何なの？　なんで俺の部屋に上がっているわけ？」

さっきと同じ質問だ。あまり同じことを聞くのは好きではないが、意味不明なことを言っているため、仕方が無い。

「ですから、私はユグドラシルより派遣されました、セレスと申します。ワーキャットの血を引いており　　って、ご主人様、なぜ電話を？」

「この場合って、不法侵入になるんだっけか？　見ず知らずの人間が部屋に入り込んで、意味不明なことを言っている　　って感じで言えばいいのかな」

受話器を取り、ボタンを押そうとしている咲人を見て、セレスと名乗る少女は悟った。

「ちよつと！　お待ちくださいご主人様っ！」

「ごはあっ！？」

セレスの拳が、咲人の顎にヒットした。

咲人の身体が、空中に投げだされる。横からのヒットの筈が、何故か上向きに吹っ飛ぶ。さながら、一昔前の少年漫画みたいな吹き飛び方だ。それこそ、牡羊座の先代の教皇が「うるたえるな小僧ども！」と叫びながら両手を上げただけで、相手が吹き飛ぶような。勿論、落ちる時は、頭からだ。

「ええと、これで暴力も振るわれて……」

「ご主人様？　警察を呼ぶのは結構ですが、果たして信じてもらえるんですかね？」

何処か黒い笑みを浮かべているセレス。

「まず、あなたほどの年齢の方が、未成年と思われる少女を部屋に連れ込んでいる。そして、私の格好ですね。メイド服に首輪、どう見ても監禁プレイをしているようにしか見えないかと」

「……………てめえ」

つまり、だ。このご時世、未成年にいかがわしいことをする不届き者が増えているため、この現場を見られたら、真っ先に疑われる

のは咲人なわけで。

それに、仮に信じてもらえたとしても、今の一撃のことだ。警察に危害を及ぼし、より面倒なことになる可能性もある。

「お解りいただけましたか」

悔しいが、この現実を受け入れるしかなさそうだ。

「あのさ、俺は今どういう状況になってんのか解らないんだけど、説明していくれないか」

「ほんと、いい歳して現実を受け入れられないなんて。そんなんだから、カノジヨに振られるんですよ。まあいいでしょう、私が説明しますね」

「現実離れしてるのはてめえだろうが。それに、人の古傷に触れやがって。なんで別れたことを知ってるんだよ」

一発ぶん殴りたい。そんな衝動をなんとか抑える。

「ご主人様は、昨晚のことを覚えていますか？」

「えっと……、食材を切らしてコンビ二に……。って、あれは夢じゃなかったのか？」

「はい、現実ですよ。そこに、えっちな雑誌が置いてありますでしょう？ ご主人様は、脚フェチなんですね。あと、二次元ではケモノミミ好きと。ああ、幕の内弁当とミルクティーは、私が美味しく頂きました」

卓袱台の上には、ブツと空になった弁当の容器とペットボトルが置いてあった。

どうやら、あれはマジらしい。

「解ったけど、何で俺の飯を勝手に食ってんの？」

「そして、帰る途中でしたね」

スルーされた。

「謎の黒い影に襲われて、愚かにも袋小路に追い込まれてしまった。そこで、弱いくせに無謀にもミルクティーのペットボトルを構えて立ち向かって」

さり気なく毒を吐いているのが腹立った。

「そこで記憶が途絶えたんだよ。お前はなんか知っているみたいだけど、いったい何なんだ？」

「あれはですね……、私達が……いえ、幻獣使い達が討つべき存在です」

今までの人をおちよくったかのような態度が嘘のように、セレスの表情が曇る。

「あれに、私の前のご主人様は殺されたんです」

「……………」

最近、この辺りで発生している殺人事件。もしかしたら、それが関係しているのかもしれない。

だが、未だ信じられない。いったい、自分の身に何が起きているのか。

このまま追い出せば、面倒なことに巻き込まれず、何気ない生活を送れるかもしれない。しかし、彼女の悲しげな表情を見ると、心をナイフで抉られたかのような感覚に見舞われる。

（ちくしょう、何だつてんだよ……）

ああ、やはり自分は甘いな

「あー、なんていうのかな。未だ状況が掴めないんだけどさ、色々とウケアリみたいだし、とりあえず何かあったら協力するよ」

「ふふふ……うふふふふ………」

「な、何だよ急に……」

「聞きましたよ、その言葉！　そして、しっかりと録音させていたかったです！」

まるで一昔前のアニメに出てくるような、魔王様のような仕草で笑い始めるセレス。完全に悪役の顔である。可愛い表情が台無しだ。懐から携帯電話を取り出し、ボタンを押す。すると、今までの会話がしっかりと録音されていた。それはつまり

「もう言い逃れは出来ませんね」

「……………」

携帯電話から流れ続ける、咲人の言葉。

そして

ごっつ！

協力するかどうかはともかく、一発殴ってやらなければ気が済まなかった。

第2話　ちょっとファミレス行ってくる

食材が無いため、朝食は駅前のファミレスで取ることにした。

一人暮らしの貧乏大学生としてあまりお金はかけたくなかったが、やはり食欲には勝てない。

朝っぱらからミラノ風ドリアというのは、なかなか重たい。二百九十九円でそこそこの味のため、学生の味方なのだが、朝から食べるには厳しい一品だ。モーニングメニューもあることはあるのだが、この店舗ではやっていないらしい。少し、悔しかった。

しかし、節約のために頼んだ咲人をあざ笑うかのように、セレスの前にはマルゲリータとミックスグリル、そしてカルボナーラが並んでいる。勿論、ドリンクバーもついている。一人分で千円を超えている。有り得ない。贅沢すぎる。

落ち着いて話が出来る場所ということで、安いファミレスを選んだのだが、このザマだった。これなら、朝ごはん抜きでよかったのかもしれないと、激しい後悔に苛まれた。

「ドリンクバーで遊ぶな、コラ」

案の定というかなんというか。セレスのグラスには、得体の知れない液体が注がれていた。色から推測すると、コーヒーマカールピスマロンソーダだろうか。味は想像もしたくない。

咲人も過去に何度か目撃したが、飲まされる側だった。だから、飲み会の二次会でドリンクバーのあるファミレスに行くのは嫌だった。しかし、酔っ払った勢いならともかく、セレスの場合は素面でやっているのだから、性質が悪い。精神年齢は小学生並みののだろうか。

「えー、遊んでませんよ。カクテルも色々混ぜたりするじゃないですか。私は様々なドリンクを混ぜることにより、更なる味の追求を

「カクテル作りとドリンクバー罰ゲームを一緒にするな！」

セレスの顔をミックスグリルの鉄板に沈めてやりたかったが、ここは我慢だ。

そんなことをして叫ばれれば、まず疑われるのは咲人だ。痴漢の冤罪が増えている世の中のため、慎重にならなくてはならない。

そして、セレスの格好だ。メイド服に首輪という、どう見ても街中を歩くような格好ではない。そんなものを装備した女の子と歩いているのだから、ただでさえ視線が痛いというのに。

「あのさ、メイド服はいいんだけど、首輪は何かなんないの？

正直、周囲の視線が痛いんだけど。まだ朝早いから、人が少ないからマシだけど」

「いえ、それは出来ません。メイド服以外の服なら、結構持っているので問題ありませんが」

「なんで？」

「先程もお話したように、私は普通の人間ではありません。もう一度、先程のことを纏めますね」

料理が運ばれてくるまでの間だ。咲人は延々と、セレスの胡散臭い話を聞かされていた。

幻獣使い　確か、そのようなことを言っていたか。彼女曰く、咲人にはその幻獣使いの素質があり、彼を求めてきたというのだが。昨日襲いかかってきた黒い影は、その幻獣使いが倒すべき存在なのだという。無謀にもペットボトルで殴りかかって返り討ちにあったところを、彼女が助けてくれたらしいが

「あー、よく解んないけど、そいつらを倒すのを協力してほしいってことか？」

「はい、そういうことです」

そんなゲームの世界でしか有り得ないようなことが有り得るのだろうか。しかし、あの出来事は夢にしてはあまりにもリアルすぎた。もしかしたら、まだ夢を見ているのかもしれないが

試しに頬をつねてみたら、痛かった。現実だった。

「でもなあ……」

話を聞いていて解ったのは、自分にも戦ってほしいということなのだ。

高校時代まで、体育の成績は十段階評価で常に8以上だったため、運動神経に関しては問題ない。しかし、いきなりあのようなバケモノと戦えと言われては、やはり躊躇してしまふ。

「そこで、私の出番なんですよ」

「はあ……」

どうやら、戦いのほとんどはセレスが片付けてくれるらしい。

確かに、あれだけの膂力があれば、問題ない気もするが。

「で、その首輪がどういう関係が？ まさか、それを取ると真の姿が……」

「ザツツライト」

まさかとは思ったが、マジだった。

最早突っ込むどころか、それを受け入れられるようになってしまった自分が恐ろしい。だんだんと彼女のペースに乗せられてきているのかもしれない。

「取るとどうなの？」

「ですから、真の姿が露わになります」

「だから、どんな姿に？ 具体的に言ってくれよ」

「ご主人様のエッチ」

ぐしゃ。

やってから周りの視線のことを気にしたため少し後悔したが、どうやら平気のようだ。それに、食べ終わっていたので問題ない。

セレスの顔を、カルボナーラの皿に押し込んでやった。ホワイトソースが顔からメイド服の胸元あたりにかけて飛び散った。

「あうう、何するんですかあ……」

調子に乗らなければ可愛い女の子なのだが 無駄な言動のせいで、何もかも台無しである。

「その辺りは実戦を踏まえた方が、解ると思いますよ。丁度、いい感じにお客さんがいらっしやったみたいですから」

ホワイトソースを拭き取ると、セレスは立ち上がった。今までのヘラヘラとした表情は何処に消えたのか、凜とした、鋭い目つきになっている。もしかしたら、こちらが彼女の本質なのかもしれない。次の瞬間、周囲の空気が張り詰めて行くのが解った。

景色は何も変わっていないが、今までの感覚とは違う。そう、昨日の夜みたいだ。

「ではご主人様、覚悟はよろしいですか？」

「待てよ、何が何だか知らないが、此処は店の中」

「心配いりません。広い範囲に結界を張ったので、外部には影響はありません。……私が斃されない限りは」

そう言つと、セレスは自分の首輪に手をかけて、金具を解き始めた。

カチャリ、と金属音が鳴り

乾いた音を立てて、首輪が床に転がった。

「はあああああああああああああああああああああああ
っ
！」

咆哮とも取れるような、勇ましい喊声。それが、この可愛らしい少女から発せられているものであることに、咲人は驚きを隠せなかった。

セレスの身体が輝きを帯び、眩い閃光を辺りに撒き散らす。まさに、光の洪水だ。

例えるならば、戦うヒロインが変身するシーンだろうか。セレスの着衣が解けて、身体のアインがくつきりと露わになる。正直、目のやり場に困ったので、咲人は視線を逸らした。あまり凝視しては、色々とマズイ。

やがて、光が収まる。すると、そこには

「力を解放するのも少々ですね。本来ならば、ユグドラシルの規約で、ご主人様の許可を頂かなければならないのですが。今回は実戦を兼ねるということで、自らグレイプニルを解かせていただきました」

かなり身軽　露出の多い　格好だ。胸と腰を覆うビキニのよ
うなものと、手足を護るレザー製のガントレットとブーツ。その上
から、毛皮のコートを羽織っている。若干、背丈が伸びて、より身
体つきが豊満になったようにも見える。

それだけならまだ良い。しかし、彼女には人間ではありえない器
官が発現していた。

頭の上から生えた獣のような耳と、腰から伸びる長い尻尾。どち
らもふさふさとしているのが見るだけで解る。まるで、ネコ科の動
物のそのように。

「……………あのー、どちらさままで？」

あまり考えたくはなかったが、確認のために咲人は尋ねた。

「ふふっ、驚かれるのも無理ありませんね。私　セレスですよ、
ご主人様」

確かに、声はセレスのものだ。その顔付きには、彼女の面影が残
っている。しかし、少し成長したかのような体躯と、何処か勇まし
い雰囲気は、先程までの彼女とはまったく別物だ。何処かとぼけた
ような少女のものではなく、凜とした女戦士の如く

驚くというより、現状を受け入れるのが困難だった。

ただ言えるのは、これが夢などではなく、現実起こっていると
いうことだ。

「……………なんなんだよ、もう」

「大丈夫です。私が斃されない限り、ご主人様が死ぬようなことは
ありません。死ぬほど痛い目に遭うことはあるかもしれませんが」

「勘弁してくれよ！」

「あなたそれでも男ですか。だらしないですね」
「ぐっ……………」

得体の知れない存在とはいえ、そのようなことを少女に言われて
は、やはり心外だ。

流石にプライドを傷つけられるのは嫌だったため、ついむきにな
ってしまう。

「解ったよ！ 戦えばいいんだろ！」

何か武器になりそうなものを探すが 見当たらない。流石に、テーブルの上に置いてあるナイフやフォークを使っわけにはいかないだろう。自分の身を守ることが第一だが、飲食店でバイトをしていると、どうもそのようなことに気を遣ってしまう。

「武器は必要ありませんよ。ご主人様は、サポートをしてくだされば結構です」

「サポートつつつても、何をすりゃ……」

「まだ完全な契約を行ってはいませんが、既にご主人様には、能力が発現している筈です。試しに、あちらに向けて何かを念じてみてください」

セレスが指差した先は、店の入口だ。レジで会計をしている客がいる。

そう言えば、さつきから周りの様子が変わった。元々、あまり客は入っていないのだが、どうも人の気配というものがまるで感じられない。

「ああ、周りのことですが、問題ありません。一時的に、此処の間を現実世界と切り離しているのです、危害はありません」

先程言っていた、結界というものののだろうか。

あまり乗り気ではなかったが、このままでは進展しなさそうなので、入口に向けて強く念じてみた。

「え……！？」

青白い閃光。

一瞬だったが、見逃さなかった。自分の指先から、電撃のようなものが、迸ったのを。

「なるほど、やはりあなたをご主人様として選んで正解だったようですね。《雷撃》ライティング 今日の術者ではなかなか発現できない力を……」

自分でも驚きだった。こんな人間離れした力など、ミュータントを題材とした映画や、守護星座の力を借りて拳で闘うアニメの中で

くらいしか見たことない。

「これ……は………？」

「来ます、準備を！」

全身に激しいプレッシャーが襲いかかる。

それは、セレスから発せられるものではなく

『その場に現れた異形』のものであることが解る。

「ギガス……。強い腕力が特徴ですが、この個体は私の敵ではありませんね。スタッフロールに流れるとしたら、雑兵Aとか、そんなポジションでしょうか」

よく解らない例えに突っ込みたいと思いつつも、現れた異形を見据える咲人。

戦う気ではいたものの、やはりこのような存在を目の前にしては、身体が動かない。

目の前に現れたのは、まさに巨人とも言えるような体躯を持っていた。緑色の不健康そうな身体は筋肉で覆われており、手には咲人の体格より太いであろう棍棒が握られている。

バケモノだ。こんなの奴が、なぜ？ 漫画やゲームに出てくるような存在が、なぜ？

こいつはヤバイ。その場から逃げ出したかったが、身体を動かせない。

「何なんだよ……、何なんだよこいつは……！」

咲人は動こうとしたが、それは恐怖により出来なかった。

情けない。あれだけ強がつておきながら、このザマだ。やはり、まだ現実を受け入れられずにいるのだろうか。

「グウオオオオオオオオオッ！」

それは雄叫びなのか。

緑色の巨人は、セレスに向けて棍棒を振りおろしてきた。もし、あれに当たれば、圧殺 いや、四肢が吹き飛ばされてしまうに違いない。

だが、セレスは避けようとすらしていない。

「バカッ、避け

」

声は届かなかった。

激しい打撃音と共に、辺りに砂埃が舞う。

床は大きく陥没していた。その場にあったテーブルや椅子は原型を留めておらず、瓦礫と化したモノが四散している。

そこに、セレスの姿はなかった。

「まったく、この程度の敵を恐れているようでは、先が思いやられますね」

上空からの声。嘲笑するわけでもなく、怒るわけでもなく、ただ淡々と咲人に対して発せられた。

ギリギリのところで回避したのだろうか。セレスは傷一つ負っていないかった。

セレスは巨人の懐へと飛び込み、拳を振り翳した。

そして

「ハアアアッ

！」

喊声とともに、巨人の腹部に拳を叩きこんだ。

目を疑った。

薄々気付いてはいたが、やはり、姿形は少女のものなのだ。そんな身体の何処に、これ程の力が秘められているのだろうか。

セレスの拳は、巨人の身体をぶち抜いていたのだ。傷口からは、夥しい量の血液　　のような紫色のものが、びしゃびしゃと流れ出ている。胃の中のモノがこみ上げてきたが、咲人は何とかそれを抑えた。

それで終わりではなかった。巨人はすぐに反撃に出ようと、再び棍棒を振り下ろす。しかし、すぐにセレスは拳を挽き抜くと、巨人の棍棒を片手で受け止めた。やはり、尋常ではない膂力だ。

「これで決めるッ　　！」

巨人の腕を踏み台にして、再び空中へと跳び上がるセレス。そして

ドグチアッ。

擬音語で表せば、そんな音だった。

先程まであったはずの巨人の頭部が、何処かへと消えていた。

暫くして、湿り気を帯びた音と共に、紫色の液体が首から噴き出し、原型を留めていない肉塊が床に転がり落ちた。しばらく、ワインは飲めそうにない。

「ふう、こんなものですね」

軽やかな動作で、地面に降り立つセレス。

彼女の脚から下は、紫色の液体で汚れていた。

第3話 DX変身首輪

実に便利な設定だと、咲人は思った。

戦いが終わってから、滅茶苦茶になっていた筈のファミレス内は、すっかり元通りになっていたのだ。空間を切り離して云々というのは、事実らしい。

朝っぱらから疲労困憊だったが、少しずつ状況を整理することが、今の彼には必要だった。

自室に戻り、お茶を淹れる。安アパートとはいえ、自分の部屋にいと落ち着くものだ。

セレスは咲人のPS3を稼働し、ゲームにどっぷり嵌っていた。光速の異名を持ち重力を自在に以下略 ナンバリングタイトル第十三作目のアレだ。咲人にとっては音楽とグラフィック以外はあまり受け入れられないゲームだったため、クリア後に積んでいたのだが。

「やっぱり、ジャマーとエンハンサーがいると違いますね。多くのゆとり世代は、戦闘が難しいのだと嘆いていますが、そういう人達は、アタッカーとブラスターしか使っていないからなんですよ。脳味噌筋肉な人間って、ホント馬鹿ですよ」

「売ろうとしていたソフトを引つ張り出てきてんじゃねえよ……。ってか、なんか寛いでるけど、お前俺を守る気あるのかよ」

そう言いつつも、お茶とお茶菓子を差し出している辺り、世話好きなのだろうか。

「ご心配なく。契約を結んだ以上、どちらかが死ぬまでお守り致します」

ゲームに夢中なため、背中を向けたまま卓袱台の煎餅を取るセレス。

戦闘が終わってから、彼女の服装は、首輪とメイド服に戻っていた。もう少しマシな服装はないのだろうかと思っ込みたいのだが、

首輪は戦闘時以外は外せないのだという。

それは、先程のことを思い出すと、何とか納得することが出来た。首輪　グレイプニルというらしい　は、セレスを始めとする幻獣^スの力を制御するものなのだという。初めは信じられなかったのだが、いざその場面を目にしてみれば、納得せざるを得ないのだ。

幻獣

セレス曰く、それは『力を持った何か』なのだという。本人も解っていないあたり胡散臭いが、先程の戦いを見てみると、嘘ではないことは確かだ。その幻獣を使役あるいは共闘するのが、幻獣使いなのだというが

「どうすんだよ、この力……」

軽く念じると、指先から弱々しい雷撃が迸った。

確かに、護身用としては便利かもしれない。しかし、こんな力を日常生活で使おうものなら、大きな騒ぎを引き起こしてしまうのは間違いないだろう。

出来れば、普通の生活を送りたいのだが

（さっきのあの表情……）

数時間前　朝食に出かける前のことを思い出す。

明るそうな雰囲気振りまいていた筈のセレスが、ふと見せた悲しげな表情。それを見せながら、言っていた。「前のご主人様は、あれに殺されました」と。

本来ならば、警察などの国家権力に頼るべきなのだろうが、どうもそういうわけにはいかないらしい。

「ゲーム中悪いけどさ」

「はい、何でしょうか、ご主人様」

ちょうど、バトルリザルトの画面になっていた。キリが良いところで声をかけたつもりだ。

特に気にすることもなくゲームを中断すると、セレスは咲人の方へと向き直った。

「もう少し、お前のことや幻獣使いとやらについて教えてほしいん

だけど。さっき聞いた固有名詞だけじゃ、パルスのファルシのルシがパージでコクーンみたいな感じでサッパリなんだよ」

やはり、まだ色々知らなくてはならない。

成り行きでこのようなことになってしまったが、やるならば最後までやり通すつもりだ。中途半端は嫌いだった。

「この世の全てを、科学で証明できないというのは解りますか？」

真摯な態度で臨んでくるセレス。普段の天然じみたのは演技なのだろうが、彼女からは真剣さが伝わってくる。咲人は突如真面目になったセレスに戸惑いを覚えたが、後のことを考えて真面目に聞くことにした。

「まあ、それはな。胡散臭いとは思っけど、テレビとかで超常現象みたいなのをよく見るし。それに、あんなものを間近で見せられれば、信じるなど言われても無理だよ」

彼女達の存在も、その科学で証明できないもののひとつなのだろう。

「でも、いまいち解らないんだよな。その幻獣使いつてのが何なのか……。そもそも、何故俺がそんなものに……」

「私は前のご主人様を戦いで失いました。主を失った幻獣は、提供される力が断たれることにより、消滅する運命にあるんです。それを免れるためには、新たな主を見つけなければなりません」

「それで、その新たな主が、俺だったってこと？」

「はい」

セレス曰く、コンビニ帰りの咲人を偶然見つけて、そのままノリで契約したらしい。

咲人からしたら迷惑な話であったが、彼女の力がなければ、あのまま謎の影に殺されていたに違いない。そう考えると、彼女に感謝すべきなのだろう。

いや、待て。そうすると、黒い影はいったい何者なのか。また新たな謎が増える。

「それじゃあ昨日の黒い影ってのは……」

「あれも幻獣の一種ですが、この世に害をなす存在。私達は、
魔獣と呼んでいます」

「魔獣……？」

「魔獣や幻獣は本来、こちらの世界　ご主人様達が暮らしている
世界ですね　こちらには干渉しないのですが、時々一部の個体が、
干渉するんです」

「昨日の黒い影や、サイズで襲ってきたあの緑色のデカブツもそう
なのか？」

「Exactly」

何故そこだけ英語になるんだ。突っ込みたかったが、話の腰を折
るわけにはいかないため、我慢する。ちなみに、『そのとおりでござ
います』という意味だ。

「つまり、俺がお前の主で、お前と共にその魔獣とやらを倒すのを
手伝ってほしい　ってことでOK？」

解ってくれて嬉しいのか、セレスは笑顔で頷いた。

「それより、普通の生活はどうなんだ？　なんか、変な力も備わっ
たみたいだし」

試しに、指先から軽く電撃を走らせる。

青白い電光は僅かに空中を進ると、小さな音を立てて四散した。

「あれ、嬉しくないんですか？　普通の方は、このような力を手に
入れると、喜ぶのですが」

セレスは不思議そうに首を傾げた。

「あー、なんていうのかな。情けない話だけどさ、こういう力って、
なんか怖いんだよ。映画とか見ていてカッコいいと思ったことはあ
るけど、使うとなると話は別でさ。お前が思ってるほど、人間って
のは賢い生き物じゃないんだよ」

「そうでしょうか？」

「歴史とか習っていると、解るんだよ。人間ってのは、大きな力を手
に入れると、それを行使せずにはいられないってのが。そうでなき
や、世界大戦とか、核兵器問題とか　。力の使い方を間違っ奴が

いなければ、歴史の表舞台には出てこなかっただろうな。

確かに、正しい使い方をすれば、それは心強い味方になる。原子力だって発電のためになるし、ダイナマイトも鉱山開発で役に立つ。だが、誰もがそういう使い方をするわけじゃないし、聖人君子のようない輩も、人間である以上間違いは起こすわけだ。

……だから怖いんだよ、俺は。もし、間違った使い方、誰かを傷付けたら、取り返しのつかないことをしてしまったら、そう思うとな。せつかくこんな力を貰って悪いけど、素直に喜べないんだ」

結構真面目な意見を述べたつもりだ。格好付けたつもりではない。歴史上で偉人とされている人物を見ていると解る。結局、それは書物に記されたものに過ぎないのだが、誰もが手に入れた力に溺れ、やがては落ちぶれていつている。

「ふふっ、どうやら、あなたをご主人様として選んだのは、正解だったようですね」

ニコリと可愛らしい笑顔を見せるセレス。

本当に、真面目にしていれば可愛らしいのだが、なんでこいつはたまにワケの解らない発現をするのだろうか。妙に、サブカルチャーに詳しいし。

「では、本契約と参りましょうか」

「は？」

突然、セレスは前かがみになり、身を乗り出してきた。

待て。近い。なぜ、近寄ってくるんだこいつは。

「待て、おいっ」

まさに、目と鼻の先といったところに、少女の顔が迫る。

人間ではないとはいえ、姿形は人間の少女そのものだ。このように顔を近づけられては、やはり恥ずかしい。それに、重力に従って、大きめな胸が揺れている。これも精神衛生上よろしくない。勿論、性的な意味で。

甘い香りが漂ってくる。少女特有の、優しく可愛らしい香りだ。

理性を押さえるのがきつい。別れた彼女もこのように迫ってきたことがあったため、経験を積んでいることは積んでいるのだがやはり、それでもきつい。

そして

「ご主人様……」

だんつ。

押し倒された。

姿形は少女だが、膂力はそれのものではない。腕を動かして振り払おうとするも、抑えつける力は尋常ではない。

逃げる 逃げられない！

「なにを……んんっ！？」

口を塞がれた。セレスの唇で。つまり、思い切り口づけされたのだ。

その場の時間が、止まった。ザ・ワールドだ。

「ん……ふっ、んひゅ……ごひゅじん、ひゃま……」

舌を入れられた。

くちゅくちゅと水音が鳴り、口の中が蹂躪されていく。

（うおおおおおい！？ 待てよ、今まで生きてきた中で、こんなイベント聞いてないぞ！？ 前のカノジヨとも、こうなるまで一カ月はかかったぞ！？）

このままではまずい。下半身的な意味で。

そもそも、何なのか。いったい何が起きているのか。今まで以上に、この現実を受け入れられない。いや、受け入れてはいけないうな気がする。

余程親密な関係にならない限り、これほどの深く熱いベーズはありえないだろう。いや、それ以前に、現実で此処までディープな接吻をする者が、いるのだろうか

それに、何だろう。色々と熱いものが流れ込んでくる。それは物理的なものではなく、身体の底の方から湧きあがるような熱さ。

身体が燃え上がりそうだ。骨が溶けているみたいだ。

「くっ、くっ……」

理性が吹き飛びそうだったが、その接吻はすぐに終わりを告げた。ほんの一分足らずの行為であったが、それは咲人にとって、非常に長く感じられた。

「んはっ……はぁ……はぁ………」
ぴちやり。

いやらしい音が鳴り、唇と唇が離れる。二つの唇の間を、粘り気を帯びた糸が引く。

抑えつける力が弱まり、ようやく自由になったが

「……契約は為されました」

「色々と待て。冷静になれ。ってか、説明しろ」

ごすっ。

起き上がって、セレスの頭に軽くチョップを入れてやった。別に嫌な気分ではない。むしろ心地よかったのだが。やはり色々と準備というものがある。何事にも、段取りが必要だ。

「あうう、痛いですご主人様……」

「だいたい、今のは何なんだよ？ 朝っぱらから盛り^{さか}やがって、犯^ヤつちまうぞコラ！」

理性を抑制するのがやっとであったため、脅迫とはいえ半分本気になりそうだった。

「本契約ですよ。今までは仮の契約だったんですが、たった今、私はあなたを本当の主として認めたのです」

「……今のディープキスが、その本契約に必要な行為だったのか？」

「はい。ああ、まだ色々とお話することがあるのですが」
もう、勘弁してくれよ。

ただでさえ、多くの設定を理解するというのに、これ以上何を聞けというのだろう。しかし、このまま逃げ出しても、何の進展もないだろう。それに、追い出すのも気が引ける。

やはり、こういうところで甘くなってしまう自分が許せなかった。「これによって、このグレイプニルを解くには、ご主人様の力が必

要になりました」

「俺の力？」

「はい。このグレイプニルは、入ってみれば、飼い犬が逃げ出さないように嵌めておく首輪のようなものです」

「首輪のようなものって、それ首輪だよな」

「つまらないツツコミですね。もう少しひねったらどうですか。個体によって異なるだけで、たまたま私のグレイプニルがこのような形をしているだけです。設定などを話すとややこしくなるので、脳味噌の足りないゆとり世代のご主人様には」

「半殺しにされたいのか？」

セレスも本心で言ってるのではないのだろうが、此処まで言われれば流石の咲人もカチンとくる。

さて、どうやってお仕置きしてやろうか。

「キレやすいのも特徴なんですね。ほんと、こういう莫迦は死なないと治りませんね。これだからゆとりは……ひぎいつ!？」

むにいいいい。にぎぎぎぎぎぎ。

咲人はセレスの頬つぺたをつまんで、思い切り抓ってやった。今までで最も調子に乗った発言だったため、ついカツとなって抓ってしまった。

女の子のためか、柔らかい感触だ。まるで、大福のように伸びる。泣き叫ぶ顔がなかなか可愛らしい。少し面白いと思ってしまった。

「ごめんにゃひゃい、ひょうふあんふえふ!!」

『ごめんなさい、冗談です』と聞き取れた。流石に引つ張りっぱなしも可哀想なので、程々のところで離してあげる。

相当痛かったのか、瞳に大粒の涙を浮かべながら、頬つぺたを擦るセレス。もしかしたら、今までのお仕置き　という名の突っ込みで、いちばん効いているかもしれない。

「ぐすん……」

「戦いになったら、そのグレイプなんちゃらつてのを、俺の力で外すんだな？」

「はい。これで私達は一心同体、一蓮托生です」

「……ま、こうなったら最後までとことん付き合ってやるよ」

溜息をつくが、此処まできたらもう引き下がれないだろう。

どうせなら、最後まで突っ走ってやる。

「勘違いするなよ。俺は中途半端なのが嫌いなだけだ。別に、お前のためにやるわけじゃないからな」

「ツンデレ？ 可愛いところあるんですね、ご主人さ……ひぎいっ！？」

こいつはまだ調子に乗るか。

咲人は再び、セレスの頬つぺたを引っ張ってやった。

第4話　いつてみヨードー

夕刻。

繁華街のネオンが点灯し始め、既にカラオケや居酒屋の勧誘が始まっている。道を行くサラリーマンや学生達に声をかけているようだが、あまり釣れているような様子は無い。不景気のため、外食で済ませる人間が減っているのだから、仕方が無いだろう。

咲人は食材を揃えるべく、スーパーマーケットへと向かっていた。この時間から行けば、タイムサービスをやっているため、食品を安く手に入れられることを、長年の経験で学んでいる。

「あのさ、一応聞きたいんだけど、いつもこうやってついてくる気なのか？」

咲人は面倒臭そうに、傍らを歩くメイド娘に尋ねる。

「え？　何処までもお供する気ですが。それはもう、地獄の底まで」
ああ、やっぱりか。

そんなことだろうと思ったが、このままでは色々やりづらい。というのも、普通の生活を送るのは問題ないと言われていたが、このように常に付きまとわれてしまつては、咲人としては勘弁してほしいかった。特に、バイト先や学校に付いて来られては、仕事や勉強の邪魔になるし、ほぼ確実に仲間内にかかわれるからだ。いや、まずついて来られたら、からかわれる以前に色々問題になるに決まっている。

さて、どうしたものか。明後日までに対策を考えなくてはそれに

「首輪はストールで隠したけど、やっぱり視線が気になるな……」

咲人は、ちらりとセレスの首元に視線を移す。

彼女の首には、黒いストールが巻かれている。咲人が過去に使っていたものだが、メイド服には少々不釣り合いにも見える。

そして、首輪はなんとか隠したものの、やはりメイド服は街中で

着るようなものではない。そのためか、道行く者達が物珍しそうに二人を見つめてくる。

「自意識過剰なんじゃないですか？ もっと堂々としましょうよ」
「……おい、誰のせいだと思ってやがる。他に服があるって聞いたから期待したけど、一番マシなのがそれだから……」

遡ること一時間前

出かける時にメイド服以外の衣装を着るようにセレスに要求したのだが、彼女が持っている衣装というのが、常軌を逸しているものばかりであった。

その一。スクール水着。こんなもので街中を歩いたら、変態痴女である。セレス曰く、局部の露出はしていないため猥褻罪には問われないらしいが、やはり社会通念で考えるとよろしくない。

その二。体操服。一応、体育祭シーズンではあるが、今時ブルマを履いている学生など聞いたことが無い。

その三。ナース服。血糊さえなければ、勤務中の看護士に見えたかもしれないのだが

その四。甲冑。ご丁寧に剣まで装備。職務質問行きです。

その五。ボンデージファッション。帰れと思った。

などなど、どれもコスプレ用の代物ばかりのうえ、一部のフエチが大喜びするようなものしかなかったのだ。その中でも、まだマシなのがメイド服というのが悲しすぎる。

他の衣装はそれよりも酷く、一緒に歩かれようものなら、恥ずかしさのあまり「アイキャンフライ！」と叫びながら、武上線にダイブしていたかもしれない。ただでさえ事故が多い電車なのに、それを止めて人様に迷惑をかけるなんてことは、絶対にできない。

「おかしいですね、前のご主人様はこのような衣装を着ると、喜んだのですが」

どんな変態だったんだよ、と突っ込みたかったが、死んだ人間を

貶めるのはよくないと思い、何とか口を噤む。

「ああ、良いこと思いつきました。いつそのこと、全裸に首輪で、ご主人様が引き回すっていうのはどうですか？ 普通は夜の公園でやるみたいですが、このように人通りが多い中でやってみるのも面白いかもしれませんよ？」

駄目だこいつ……早くなんとかしないと……

そんなくだらないやりとりをしているうちに、7とiが描かれた看板が見えてきた。行きつけの小売店だ。数年前までは赤と青の地に白い鳩が描かれていたのだが、持株会社傘下の子会社となってから、図柄が変更されたという。

やはり時間が時間のためか、店内は多くの主婦が訪れていた。よくドラマであるような血で血を洗うような争奪戦はないようだが、安く良い品を買うには、のんびりしていられない。

「ああ、なんか食いたいものとかある？ あまり豪華なものは作れないけど」

成り行きでだが、セレスと一緒に暮らすこととなったのだ。記念といっではなんだが、彼女の希望を聞いてやるのもいいかもしれない。勿論、フォアグラだのキャビアだの言ってきたら、張つ倒す気だが。

「ご主人様って料理できるんですね。凄いです！」

自炊していることを意外に思ったのか、セレスは感嘆とも思える表情を見せた。

「え？ 一人暮らししていれば、それくらい普通じゃないか」

セレスに限らず、自炊していることを人に話すと驚かれる。しかし、咲人としては自炊が当り前の日常の一部となっているため、特に誇るようなことではないのだ。

「いえ。私がずっと過去に契約していたご主人様は、一人暮らしだというのに、自炊はしていませんでしたね」

「ずっと過去？」

「ええ。私達幻獣は、人間よりも寿命がずっと長いので」

「なるほどな。今までいろんな奴と契約してきたワケか」

まあ、人間とは異なる生命体なのだから、長く生きていても不思議ではない。

先程までは色々と突っ込みたいことばかりだったのだが、段々とセレスの不可解さに慣れてきてしまっていることに、咲人は少しやりきれない気分になった。

いや、待て。

「……ってことは、お前って何歳？」

ちよつとした好奇心で、咲人はセレスに年齢を尋ねた。

だが、答えは返ってこない。セレスはワザとらしく咲人から視線を逸らし、陳列棚を見ている。

聞いてはいけないことらしい。

「まあ、いいや。でも、そのずっと前に契約していたご主人様ってのは、自炊無しで生活出来たのか？ 外食ばかりってワケにはいかないだろ」

「いや、ごく稀に作ってたんですが、それ以前に食事なんかしていたらネトゲの時間がもつたいないとか」

「……なんて不健康な生活なんだ」

「なんでも、『ネトゲの中だと俺は英雄なんだ』とか言っていました」

ああ、典型的なダメ人間か。口には出さないが、咲人は素直にそう思った。

確か、高校時代にもMMORPGに嵌って、家から出なくなった同級生がいた。そいつも確か、「今日はカノジョと湖畔をデートするんだ」とか「僕は有名な組織のリーダーなんだぞ」とかほざいていた。実にバカバカしい。そういう人間に限って、現実世界での地位は低いのだ。スクールカーストでは、当然最下位である。所謂『Bランク』に属していた咲人には、関係ない話だが。

「ぶっちゃけ、どうなんだそれは……」

「ええ、最低でしたな。幻獣使いとしてはそれなりでしたが、社会不適合者というか。食事は毎日ジャンクフードでした」

うわ、こいつハッキリ言っちゃったよ。

まあ、でもCランク及びDランクの九割は、そのような運命にあるのだから仕方が無い。あとは、コミュ力でカバーするしかないのだ。

「話戻すけど、何食べたい？」

「ミルクシチューとか……」

「これまた時間のかかるものを。作れはないけどな」

軽く嘆息を漏らすと、咲人はシチューのルーを手に取り、消費期限を確認した。問題ないのを確認すると、買物がごへと投入する。

次に向かうのは、乳製品のコーナーだ。此处でも消費期限と値段を確認し、もっとも良いものをかごへと入れていく。数日分の朝食になるであろうヨーグルトも、買うことにした。

あとは、シチューに入れる野菜と肉、そしてこの先数日間の食材だ。二人になったため、少し多めに買う必要があるかもしれない。

「あー、コスプレ用の衣装は大量に持ってきたみたいだけど、他の生活必需品はどうなんだ？」

「大丈夫ですよ、しっかり持ってきたので」

少し自慢げに言うセレス。

意外にしっかりしているらしい。普段からこうであってほしいのだが

「あとは、卵と朝食用のパンを多めに買っておくかな……」

あまり買いこみ過ぎても、あとで使わずに腐ってしまったとなっては勿体ない。慎重に、これからの献立と財布の中身に相談しなければならぬ。

「野菜と肉は？」

「お前は何かわかつちやいないな。確かに此処のスーパーは安いが、野菜と肉は、個人商店で買った方がより安く良い品質のが手に入るんだ」

「ふふつ、うふふ……」

「何だよ、気持ち悪いな」

「いや、ご主人様って良いお嫁さんになりそうだなって」

ケチくさいと言われただけマシだったが、そう言われるのは心外だった。

せめて、良い旦那さんになると言ってくれ。そう思いながら、卵のパックを手取るうとする。

刹那

「……なあ、なんか妙にピリピリしないか？ 空気が震えてるっつか」

確か、この感覚は

「近いですね。こちらに敵意は向けていないようですが……、見られているというのは、あまり良い気分ではありませんね」

そう言つと、セレスは右手を掲げた。

その場に、特殊な空間が形成される。規模はあまり大きくないと判断したのか、セレスから半径三十メートルほどの、小規模なものだ。

結界である。空間を現実世界から一時的に切り離し、周りからの干渉を防ぐものだ。

「あら？ 気配を消したつもりなんだけど……」

そこに現れたのは、妖艶な姿の女性だった。

真っ黒なドレスを着ている。ワザとらしく胸元が開いており、そこから大きな胸がはみ出そうである。高貴というよりも、淫靡という言葉が相応しい。髪型も凄い。メガ盛りとでも言うのだろうか、如何にもお水っぽい髪型である。少し前に話題になった、「昇天ペガサスMIX盛り」程ではないのだが、まさにキャバクラ嬢のような女性である。

そして 背中から生える一対の翼。天使を思わせるかのような純白の翼と、悪魔を思わせるかのような黒みを帯びた紫色の翼だ。その出で立ちから、こちらの世界の者でないことは、非現実を引き

込まれたばかりの咲人でも、すぐに解った。

「もう、ストーカーなんて趣味が悪いですよ、リイナさん」

そう言っ、セレスはむーっと頬を膨らませる。咲人はちよつと可愛いと思っしまった。

「人聞きが悪いわね。私はただ、セレスちゃんの気配がしたから、寄ってみただけなのに」

ワザとらしく、身体をくねらせる女。如何にも、『そっちの商売』をやっていそうな感じだ

「知り合いか？」

「知り合ひも何も、私の上司ですよ。ユグドラシルの」

「そうか、上司なのか……っ、ええええええええええ！？」

我ながら、素っ頓狂な声を上げてしまつたと、咲人は思つた。

こんな如何にもお水っぽい人が、中学生くらいにしか見えないセレスの上司なのか。いや、それ以前に、このような格好で街中を歩いている辺り、普通ではない。都内ならともかく、このような中規模な衛星都市のひとつに過ぎない町で見かけるとは。

「その子が、あなたの新しい契約主なのね。前の冴えないサラリーマンなんかより、ずっといい男じゃない」

「ふふっ、私もそう思います」

酷い言われようだ。ネトゲ中毒の契約主はともかく、咲人が契約する前の主が可哀想である。というか、少し前はその人のことで悲しんでいたような気がするのだが、気のせいだろうか。

「えーと、あのー」

「あら、いけない。自己紹介がまだだつたわね」

思ひだしたかのように、有翼の女は胸元から名刺を取り出した。結果を張っているとはいえ、少々大胆過ぎではないだろうか。

「私の名前は、リイナ。上級幻獣ルシファアの眷族よ。これから共に戦うこともあるかもしれないから、以後よろしくね」

リイナと名乗った女性は、妖艶な笑みを浮かべてウィンクした。

「俺は一条咲人です。なんか、よく解らないまま幻獣使いつてのに

なっただけど……」

「それは、これから学んでいけばいいわ。ああ、それと、明日の夜、空いているようだったら、本部まで来てほしいな。場所は、セレスちゃん知っているとと思うから」

「はあ……」

なんか、次々と物事を進められてしまっているため、なかなか整理がつかない。

「基本的なことは、セレスちゃんから聞いていると思うけど……」
彼女達が、人間とは異なる存在であること。そして、その幻獣と呼ばれる者達を従えたのが、幻獣使いであること。

目的は、こちらの世界に現れる魔獣イヴルという存在を倒すこと。そのようなことを聞いている。

しかし、考えてみると意外であつた。普段、何気ない生活を送っている中で、彼女達のような存在が戦いを繰り返しているなんて、誰が予想できるのだろうか。

「そつだ。挨拶代わりといつてはなんだけど、契約したことによつて発現した能力を見せてほしいな」

興味深そうに、リイナは咲人を見つめてきた。明らかに、駅前で勧誘しているような表情だ。副業で水商売でもやっているのではないだろうか。

特に断る理由もないため、安全な方向へと軽く念じてみる。

進む電光。だいたいコツは掴めたためか、どのような形で雷を具現化するかも、コントロールできるようだ。しかし、まだ実戦経験が一度しかないため、いざ戦いとなった時に使えるかどうか聞かれれば、これはまた別の話なのだが。

「わお、《雷撃》ライティングの能力ね。ボウヤ、なかなかやるじゃない」
褒められたが、ちよつと複雑だつた。

確かに、強力な力なのだろう。しかし、だからこそ扱いには気を付けなければならないのだ。

「ご主人様の中から、凄いパワーを感じたので、契約主を選んだの

です」

えへん、と胸を張るセレス。

「うふふ、正解よ、セレス。長年生きてきたから解るけど、この子は一般人の出身なのに、優れた力を身体に秘めているわ」

とにかく、自分が凄いのは解った。

だが、このままだと置いてけぼりなわけで。

もう少し詳しく話を聞こうとしたが

「あ、いけない！ 早くお店に行かないと、遅れちゃうわ！」

腕時計を見て、突然慌てだすリイナ。午後六時を回っているようだが、何かあるのだろうか。

「それじゃあ、セレスちゃん。後のことは頼んだわよ！ じゃあね！」

それは、まさに一瞬の出来事であつた。

張り詰めた空気が拡散し、切り離されていた空間が元に戻る。気がついた頃には、リイナという女性の姿は、その場から忽然と消えていた。

「上司って言うてたけど、何者なんだよ今の美人さんは」

美人というのは、咲人の本心である。お水っぽいとはいえ、美人であるかどうか聞かれれば、確実に否定することは出来ないような女性だったのだ。

まあ、やっているうちに何とかなるか そう思いつつ、咲人は買い物を続けることにした。

セレスはさつきから嬉しそうなのだが、何かあつたのだろうか。にやにやしていて、ちょっと気味が悪い。

ちなみに、渡された名刺には、近所のキャバクラの店名が書かれていた。

第5話 光速の異名を持つ以下略

食材を買え揃えた頃には、すっかり空が黒く染まっていた。

冷たい風が、夜の街並みを駆け抜ける。秋も深まりつつあるため、そろそろ厚着を用意しなければならないだろう。

「結構冷えるな……。今度、古着屋いくかな。実家から送ってもらうのもアリだが、あまりカッコいい服無いしな」

「アレですか？　なんかガイアがオレにもっと輝けみたいなのを探すんですか？」

「アホか」

度々話題になる、勘違い系のファッション誌に書いてあったキャッチコピーだ。痛々しすぎて、並大抵の中二病患者は裸足で逃げだすだろう。

「ファッションかあ。過去に契約していたご主人様の中に、髪の毛を赤く染めて、男性なのに厚化粧をしている人ならいましたね。服装も真っ黒でシルバーアクセサリを大量につけて……」

「何処の三流バンドだよ」

「いえ、ただの高校生でしたよ。でも、毎日のように痛々しい歌詞を書いていました。勿論、楽器の演奏など出来ませんでした」

「ああ、アレか。暗い歌詞書いてる俺カッコイって勘違いしている奴か。それとも、教室でドヤ顔で無駄に複雑なスコアを見ているような奴か」

くだらない話をしているうちに、公園についた。

秋の公園というのは、どうも寂しい感じがする。つい一ヶ月前までは緑色だった葉も徐々に色あせ、死へと向かいつつある一枚一枚の生命達が、壊れかけの電灯に照らされている。

当然、人の姿などほとんど見当たらない。目に付くのは、端の方でボロボロの毛布にくるまって寝ているホームレスだけだ。数年前までには、不良達がこの辺りの公園に集まっていたが、最近はおま

り見かけることが無い。時代は変わりつつあるらしい。咲人もその一員だったこともあったため、更生したとはいえ、何処か複雑な気分だった。

昼の時間帯も、昔ほど人が訪れなくなっている。というのも、最近の親というのは、危ないという理由で子供を外で遊ばせないらしい。また、子供が怪我をしたからという理由で、遊具を撤去するように求める馬鹿な親もいるのが現実だ。そのようなことから、軟弱なガキしか育たないのだろう。少し血まみれになるくらいが丁度いいのだ。

そのため、昼の公園は、寂しそうにブランコに乗る中年の男性くらい。所謂、社会の負け組。しか見られなくなっている。二十代三十代で失敗したのならともかく、あの年齢で首を刎ねられたのでは、再就職は厳しいだろう。そんな大人にはなりたくないものだ。自分の将来は、もう決めてある。大きな野望は無いが、既にそのための資格をいくつも取得している。しかし、勉強ばかりではなく、適度に息抜きもしている。そうでなければ、大学でぼっちなどという負け組になりかねない。何事もほどほどが重要だ。

大学でぼっちな人間ほど、哀れな存在はない。先週、最前列の右端にいたぼっちが、周りの人間と話し合うように教授に言われたにも関わらずに何もせず、教室を追い出されたばかりだ。教室中の学生たちが爆笑したのは言うまでもない。勿論、咲人はそんなヘマをやらかすことはなかった。

しかし、新たな壁にぶち当たった。

「お腹すきました……」

今日の朝から部屋に転がり込んできた少女　セレスを見て、咲人は軽く溜息をついた。

果たして上手くやっていけるのだろうか。将来のこととはともかく、こいつとの付き合いをどうするかだ。コミュ力に自身のある咲人だが、頭を抱えなくなるような状況に陥っていたのだ。

中途半端なことは嫌いだ。やるならば、徹底的にやりたい。しか

し、これは努力云々でなんとかなるようなものではないのだ。そもそも、現実世界の常識が通用しないようなことに、足を踏み入れてしまったのだから。

「あれ、ご主人様どうしたんですか？ まさか、休み明けに学校に行くのが嫌だとか？ あれですね、お昼は一人でトイレでパンを食べるようにや……ひぎいつ!？」

頬つぺたを引っ張ってやった。じたばたとする姿が、これまた可愛らしい。

失礼な奴だ。充実しているわけではないが、そこまで酷いキャンパスライフなど送っていない。というか、一人で食べているのを見られても全然気にならない。

そもそも、便所飯など、都市伝説に過ぎないのではないだろうか。トイレで食事をするなど、とてもではないができない。そんなことをする人間など、いるはずがない。

「あにやにやにやにやにやつ！ はにやひひえ！ はにやひひえごひゅひんひやみやつ！ いひゅひゅひやひゅひゅひよひよひ！」

「ちゃんと、人の言葉で喋りなさ」

ああ、そういうことか。

気配を悟ると、咲人はセレスの頬から手を離した。

「ふええ……」

涙目になりつつも、セレスは手を掲げて、公園内に結界を展開した。

それはつまり、彼女に関係する存在が、この近くにいることを表していた。

「来ますよ、ご主人様」

頬を擦りつつも、真剣な表情で咲人に声をかけるセレス。

「えー、あれ言うのかよ？」

「そうしないと、私の封印が解けませんよ！」

「仕方ないな……」

咲人は一呼吸置くと、グレイプニルを外すための、言葉を唱え始

めた。

「契約者イチジョウ・サキトの名に於いて、幻獣セレスに命ずる。汝の真なる姿を、具現せよ！」

臭い台詞だと思いつつも、ひとつひとつに念を込めて、解除の言葉を紡いだ。

契約を結んでいる場合、契約主の言葉が無ければ、幻獣は本来の力を発揮できない。咲人の幻獣となったセレスは、彼の言葉によって、その真の姿を現すようになったのだ。

「来ました！ 来ましたよ！ 力が湧いてきますす！」
かしゅん。

乾いた音を立てて、首輪が外れる。

セレスの身体が、黄金の光に包まれた。夜だと言うのに、公園内が朝日に照らされたかのように明るくなる。もし、この結界とやらがなければ、人が殺到していたに違いない。

来ていたメイド服が光に解けるかのように消え去り、身長割にかなり発育した少女の身体が露わになる。

そして

「お待たせしました、ご主人様」

そこには、真の姿を現したセレスが佇んでいた。

成長した身体つきに、猫耳と尻尾。野性的になり、露出が多くなったが、不思議と淫らさは感じさせず、凜とした誇り高い戦士の如きオーラを、纏っているのが解る。

ワーキャット 猫と人間が合わさったかのような出で立ちの幻獣である。

「相手も来たようですね。数は多いようですが、私達の敵ではありません」

解放を待ち構えていたのか、二人を取り囲むかのように、討つべき敵が現れる。

「本当に大丈夫なんだろうな……」
あまり弱みを見せなくなかったのだが、心の中で思ったことが、

口に出てしまった。

怖い。めちゃくちゃ怖い。出来ることなら、逃げ出したい。だが、そんなことが許される筈があるのか。

中途半端なことは嫌いだ。一度やると決めたのだから、やるしかない。

「大丈夫です。それに、ご主人様の熱意が、伝わってきています」にこりと微笑むセレス。その微笑みは可愛らしさよりも優しさを孕んでいるのが解る。まるで、弟子を温かく見守る師のようなそんな微笑みだ。

信頼されているのならば、期待に応えなければならぬだろう。実質、これが初の実戦だが、自分の出来ることを可能な限りやり通すつもり。いや、やってみせる。

意識を集中し、目標を捉える。襲いかかってきたのは、スライムのような魔獣だ。^{イヴル}青紫色で玉葱型をしている。どうやら、魔獣というのは、ゲームの世界に出るような個体ばかりらしい。

タイミングを見計らい、敵の頭上から一筋の雷撃を落とす。紫電の矢が降り注ぎ、スライムを次々と撃ち抜いていく。まだ精度は悪いものの、雷撃を受けたスライムは、その熱気の影響か、白煙を上げてその場から消滅していった。どうやら、仲間になるようなことはないらしい。

「お見事です、ご主人様」

その間にも、セレスは二倍以上の敵を倒していた。

ついさっきまでいた、学校の理科室に置いてある骨格標本のような敵は、粉々に砕け散っていた。その残骸と思われるような骨の一部が、地面に転がっている。あれだけの臂力でなぐられたのだから無理もないが、少々やりすぎではないだろうか。

「ハアアアアアアアアアアッ！」

可愛らしくも勇ましい声とともに、セレスの上段回し蹴りが、二足歩行の狼のような魔獣の頭にヒットした。

ぶちん、と嫌な音が鳴る。だいたい何が起こったのか解ったため、

なるべくそちらを見ないように、咲人は自分の敵に集中する。あんなものを一日に何度も見せられては、たまったものではない。

敵の駆逐は順調に進んでいった。あまり強くないためか、然程苦戦するようなことはないように思える。

「ごばああつ！」

人型をした黒い影が、咲人へと襲いかかった。

喧嘩に明け暮れていたために、反射神経には自信があった。彼はその場から飛び退いて背後を取ると、魔獣の後ろから雷撃を放ち、その身体を撃ち抜いた。雷の熱により焼かれた魔獣は、甲高い断末魔の叫びを上げて、消滅する。

「くっそ……」

確かに、順調に倒せている。しかし、咲人の表情には、疲れの色が見え始めていた。

というのも、全力で雷を出しているためか、身体にかなりの負担がかかっている。やはり、実戦となると、話が違う。

「もう少しですよ、ご主人様」

セレスの身体は、魔獣の血液に塗れていた。格闘術だけで、これだけの殺傷能力を持っているのだから、相当なやり手なのだろうか。戦いぶりも人間離れしているため、幻獣とは恐るべき存在なのかもしれない。もし、人間の身体であの一撃を受ければ、まさに木っ端微塵に　完全に破壊されてしまうに違いない。

また、彼女は息ひとつ上げていない。表情に疲れた様子もなく、特に無理をしているようにも思えない。表情に疲れた様子もなく、

幻獣とは、如何に強く恐ろしい存在なのか

「もう少しつつつても　」

左腕を何かが掠り、洋服の袖が切れる。疲れのためか、少し気を抜いていたらしい。幸い、中は切れていないようだ。

見てみると、小さな鬼のような姿の魔獣が、何かを投げようとこちらを窺っていた。咲人はその隙を与えようとせず、すぐに意識を集中させ、横一直線に雷を放った。

「しかし、妙ですね。魔獣にしては、動きが統率されているような……」

今までの経験で、このように魔獣が波状攻撃をしかけてくることは、まずなかった。

まず、魔獣という存在は、その辺りを徘徊している野良犬。それが凶暴になったような存在。に過ぎない。意志を持っているとはいえ、ただ本能のまま襲いかかってくる獣に過ぎないのだ。幻獣と同じような存在とはいえ、そもそもランクが違う。

確かに、魔獣達は群れを成すこともある。しかし、それでも幻獣とは知能レベルは異なるし、これほどの統率力は有り得ない。

だとすれば、考えられることは

「なるほど、どうやら私達を狩ろうとしているみたいです。小賢しい……」

短剣を掲げて襲いかかってきた骸骨を連続攻撃で粉々に砕くと、セレスは悪態付いたような表情を見せた。

「なんか知ってるのか？」

先程買ったものが無事か確認しながら、セレスに背を預けて尋ねる咲人。卵が入っていたので気掛かりだったが、特に割れている様子は無い。牛乳のパックも無事のようだ。

「ご主人様。最近、この辺りで何か起こりましたか？」

「何かって……ああ、そう言えば」

こここのところ、地元の新聞に載っていることを思い出す。

何気なく暮らしているが、最近、市内で殺人事件が何件か起きている。そのためか、小中学校では、早めに授業を終えることが多いらしい。比較的治安の良い都市であったため、住人達は驚きと不安を募らせている。

無差別殺人のようで、若い女の子が殺されたこともあれば、一人暮らしの老人が殺されたこともある。ここ数日では、郊外のマンションでセールスマンが被害に遭ったらしいが

「やはり……。こちらにあの者がいるのは想定外でしたが……」

「なんだよ、あの者って」

「いるんですよ。力の使い方を間違ってしまった、幻獣使いが」

「おい、それって……」

「ええ、そうです。ご主人様もその者の手下に襲われたのです」

「なんてこった。自分も下手したら、被害者の一員になっていたに
違いなない。」

「でも、いったい何のために……」

「力を誇示したいのではないのでしょうか。弱い人間ほど、自分を強
く見せようとする」

何処か引つかかる言葉だった。

弱い立場にあるならば、努力をして這い上がればいいだけの話だ。
何故、このようなバカバカしい手段を？

「不器用な人間というのがいるんですよ。それは、幻獣にも言える
ことですけどね」

吐き捨てるかのように言うセレス。

既に、彼女の周りには敵は残っていないかった。咲人もなんとか、
自分の周りの敵を駆逐し終わり、深呼吸をしている。

「さて、そろそろ……」

セレスの背後から、何かが襲いかかろうとしたのを、咲人は見逃
さなかった。

犬だ。それも、かなりの大型の。そいつが、まるで獲物を捕らえ
るかのようにジリジリと間合いを詰めている。

どうやら、倒し切れていなかったらしい。犬は牙を剥いて、セレ
スの背後から襲いかかってきた。

声をかけたところで間に合うまい。それならば
「チィッ」

疲れて動くのも億劫だった筈だが、気が付いたら身体が動いてい
た。

「きゃっ、ご主人様　！？」

咲人はセレスを抱くように、そのまま地面に押し倒した。

やわらかい胸に顔をうずめる形になってしまったが、そんなのを気にしている暇などなかった。

次の瞬間

少しでも遅かったら、背中を挟まれていたに違いない。二人がいたところに、重機で地面を掘り返したかのような跡が残っていた。

「ったく、お前が油断してどうすんだよ」

「申し訳ありません、ご主人様」

土を払いながら起き上がる二人。軽く打った程度で、特に怪我をしていないのが幸いか。

「それにしても、何なんだよ今の奴は」

確かに、何かが襲いかかってきたのを、咲人は見逃さなかった。

しかし、そいつの姿は既になく、殺風景な夜の公園が広がるだけだった。

「一瞬だけど、見えたんだよ。お前は気付かなかったのか？」

「申し訳ありません。気配はしたのですが、ご主人様が声をかけなければ、攻撃を受けていたでしょう。姿はとらえられましたが……」
物音や嗅覚で追っているのだろうか

「姿は、大型の犬のようなものでした。私達の定義だと、ヘルハウンドの個体ですね」

過去に、ゲームや西洋の文献を見たことがあるので、その名は聞いたことがあった。

「……とりあえず、さっさと帰ろうぜ」

第6話 最初の晩餐

「……」

十数年前にちびっ子たちの間で流行ったアニメのオープニングを歌いながら、咲人は夕食の支度をしていた。ちなみに、彼は射手座である。

彼がかき混ぜる鍋の中ではミルクシチューが煮立っており、クリーミーな香りが部屋中に漂っている。もうすぐ、出来あがるだろう。一方、セレスはカピバラをモチーフにして作られたキャラのぬいぐるみ。しかし、どう見てもカピバラには似ていない。にまたがり、相変わらずPS3で遊んでいる。

「ご主人様って星座は何ですか？」

「……射手座だけど？」

歌うのを途中でやめて、咲人はセレスの問いに答える。次に何を言ってくるかは、だいたいはあるが、想像できた。この歌を歌っていて、星座の質問なら、ひとつしかない。

「ああ、カッコよく死んだけど、原作では戦っている描写が無い空気な人ですね。アニメでは回想シーンで戦ってましたが、技名がアトミックサンダーボルトとかいう、無理矢理付けた感じの」

「お前は何を言っているんだ。アイオロスなめんなよ。アイオロスがいなければ、ストーリーは始まらなかったんだぞ」

現在では考えられないことだが、当時の子供達の間では、星座力ースト制度なるものが存在した。牡牛座と蟹座と魚座の子供達が弄られキャラとして確立したのは、言うまでもない。アニメの中の話だが、子供というのは残酷なものだ。咲人は少し後の世代だったため、星座力ースト制度の被害をあまり受けずに育ったのだが、自分の星座をなめられるとやはり腹が立った。

「それで、お前はどんなんだよ」

「獅子座ですけど」

「チツ……弟の分際で……」

マイナス面がほとんどない、勝ち組の星座だ。もしこれで負け組の星座だったら、散々に弄ってやろうと思ったのだが。

星座カースト制度の話題にうんざりしていると、テレビから激しい銃声が響いてきた。

「もつと鉛が欲しいかッ！ 泥でも舐めてろッ！ 俺の銃弾は地獄への片道切符ッ！ てめえは自分の血だまりで泳いでろッ！」

なんてアグレッシブな発想だ。エレガントにも程がある。

小物臭い台詞である。というよりも、重度の中二病と思われるもおかしくない台詞だ。見てみると、美少年が宙返りをしつつ拳銃を乱射していた。しかし、主人公ポジションなのに、その台詞は如何なものだろうか。

「悪いけど、もうちょつと音量落としてくれ。苦情が来たら面倒だ。少し前にも、大音量でドラムをやって追い出された莫迦がいるんだ」

料理に夢中のため、咲人は声だけをかけてシチューの鍋の火を止めると、戸棚から包丁とまな板を取り出すと、丁寧に洗って、その上を買ってきたキャベツとトマトを転がせた。行きつけの青果店で手に入れたものだ。旬ではないが、都市の近郊で栽培された採れたての野菜である。

そういえば、少し前のアニメに、キャベツが謎の球体として描写されたことがあったな。原作は良かったのに残念だ。そう思いつつ、野菜を切る作業に入った。

乾いた音が響き、野菜が切られていく。器用なわけではないが、毎日このように自炊をしていれば、自然と包丁さばきも身に付いてくるものだ。

「もう出来るぞー」

ゲームに夢中なセレスに声をかける。ここでよく返ってくる答えは、「まだセーブできない」なのだが、素直に従っているあたり、余程お腹が減っているのだろう。

サラダを盛り付け、ミルクシチューを器に入れる。主食はパンだ。

出来あがった料理を運び、卓袱台の上に並べていく。今まで一人分の食事しか作らなかったためか、まだ余裕はあるものの狭く感じられた。

「わぁ、美味しそうですね、ご主人様」

たいした物を作ったわけではないのだが、セレスは目を輝かせている。

「ちゃんと手洗ってな。足りないようだったら、おかわりもあるから」

なんだが、歳の離れた妹を持ったような気分だった。セレスが手を洗い終わったのを確認すると、二人揃って食卓に就いた。

「いただきます」

「いただきます」

手を合わせて、挨拶する二人。

セレスは、早速リクエストしたミルクシチューに手を付け始めた。育ちが良いのだろうか、意外に行儀が良い。汚らしい音も立てず、美味しそうにシチューを口に運んでいる。

「美味しいです、ご主人様」

「おう、満足してもらえて何よりだ」

咲人は、素直に嬉しいと思った。普段、誰にも料理を振舞うことが無いため、このように素直に感想を言ってもらえるとありがたかった。また、一人暮らしをしていると、どうも食事の時間というのは寂しい。しかし、今はこうやって、一緒に食べる相手が出来たのだ。そう考えると、悪くないかもしれない。

「食事中に申し訳ないんですが、さっきのことでお話が」

「ああ。俺もそっちの人間になったわけだからな、ちゃんと聞くよ」
「……あのような行動は、なるべく慎んでいただきたいです」

ワンテンポ置いて、セレスは話し始めた。彼女の表情からは、笑みが消えていた。

少し怒っているようだ。普段の天然じみた、ちょっと抜けたような雰囲気は無く、真摯な態度と口調で、セレスは話している。戦闘

時の凜とした印象は無いが、サファイアのように澄んだ双眸で見つめられては、咲人も真面目に話を聞かざるを得なかった。

「何のこと　って、ああ……」

少しの間考えたが、すぐに答えは出た。

公園で魔獣イグルが襲いかかって来た時、最後の一体の存在を目視した咲人は、セレスを突き飛ばして魔獣から守ったのだ。自然と身体が動いたので自覚はなかったのだが、今思い出してみると、かなり無謀なことをしたことを思い知らされる。その証拠に、身体の何ヶ所かを打ちつけてしまっているのだ。

「魔獣の攻撃を一度や二度受けた程度で斃されるほど、私達はヤワではありません。しかし、生身の身体で一撃を受ければ、ひとまりもありませんよ」

その魔獣が、大型の犬だったことは覚えている。そいつの攻撃で地面が抉られたのだが、それこそ重機で土を掘り返したかのような爪跡が残ったのだ。もし、自分があの攻撃を受けていれば、背中をザックリと　いや、真つ二つにされていたかもしれない。

「悪い……」

食事の手を止めて、スプーンを手放す。皿にスプーンが当たり、乾いた金属音が空しく響いた。

「……でも、私を守ろうとしてくださいましたんですね」

セレスも食事の手を止め、申し訳なさそうに俯いている。

「解らねえよ。何か知らないけど、あの時は勝手に身体が動いてたんだ。多分、心の何処かで、お前を守らないと　そう思ってたんだろうな」

自分は何を言っているのだろうか。恥じらいからか、顔が熱くなってくるのが自分でも解った。

「ありがとうございます。……私ももっと強くなければなりませんね」

にこりと微笑むセレス。

こうして見てみると、やはり美少女であることが頷ける。常にこ

んな感じならばいいのに

そう思いながら、咲人はスプーンをとって、シチューを口に流し込んだ。

と、その時。

『デーデーデーデーデーデーデー、デーデーデーデーデーデーデー』

床に放り投げてあつた咲人の携帯から、『インペ アル・マーチ』

帝国軍のテーマが流れてきた。画面表示を見ると、そこには「
一条咲亜^{いちごうみきあ}」という名前が表示されていた。

「……姉貴かよ。悪いな、ちよつと出てくるから食つていいぞ」
どういうわけか、咲人は顔を真っ青に染めながら、リビングからそそくさと出て行った。

「……ははぁん、これは何かありますね。ご主人様の秘密を握るチャンスかもしれません」

気になったセレスはこっそりと咲人の後をつけて、扉の向こう側で通話をしている彼に耳を傾けた。すると、今までの咲人からは想像もつかないような、何処かビクビクとした声が聞こえてきた。

「えつ、ちよつと勘弁してよ姉さん。えー、ちよつとマジ無理だつて。いや、ほらね、こつちも生活が……。え、あ、はい……はい……、ごめんなさ……はい……」

「むう、これはお説教でしょうか。ご主人様のお姉様というのは、厳しい方なのでしょうかね」

今までの咲人の態度が嘘だったかのように、妙にしおらしくなっている。相手に姿が見えていないというのに、ペコペコと頭を下げている。まるで、取引先と不備があつたのを電話で詫びているビジネスマンのように。

いったいどのような内容なのだろうか。相手の声が聞こえてこないのが残念だ。

「いや、そうじゃないけどさ。もしかしたら、俺出掛けるかもしれないし。うん。そうそう、友達の家とかで飲むかもしれない。いや、

発表はずつと先だし、試験もまだだし……ええ？ アパートの管理人さんに話つけてる？ いや、そうじゃないけど……、いえ、なんでもねえ……じゃなくて、なんでもないです。すみません……。うん、解った……。大丈夫、こまめにやってるから……。はい、大丈夫です……。はい、では……」

長電話になると思いきや、意外に早く終わっただけ。

「……いつからいた？」

「あ……」

こっそりと盗み聞きするつもりだったのだが、見つかってしまったらしい。セレスは気まずそうに視線を逸らせようとしたがどちらにしろ、このまま制裁を食らうのなら、思い切りからかってやる。そう判断したセレスは、口元に手を当てて意地の悪そうな笑みを浮かべ、咲人に向き直った。

「ははあん、お姉さまには頭が上がりな　　ひぎいいいいいいいつ……！」

最後まで言おうとしたが、咲人の動きの方が数段速かった。

「てめ、このやろ、人の電話を勝手に盗み聞きしやがって！」

咲人は喚きながらセレスを押し倒し、彼女の頬を思い切り抓った。

「ふにやああああ、ひやめひえ！　おひやひやひやひえ！」

もつれ合うようにして地面を転がる二人。傍から見たら、恋人同士がじゃれあっているようにしか見えない。

「クソッ、いいか、このことは絶対口外するなよ！」

「わひやひひやひひやっ！　わひやひひやひひやひやひや　　ひやひやひひええええっ！」

涙を浮かべて大声で喚くセレス。流石にこのままでは可哀想と思ったので、咲人は満足したところでセレスの頬から手を放した。

「ふええええ……何なんですかもう……」

「そのな……、今度姉貴がウチに来るみたいなこと言ってるさ……」

先程の電話の内容を思い出し、頭を抱える咲人。

咲人には、二歳年上の姉がいる。現在は就職しており、あまり顔

を合わせる事が無いのだが、度々電話やメールが入ってくるのだ。その度に、咲人は悩まされている。というのも、過去に色々あったために、姉に対して頭が上がらないのだ。

「いいじゃないですか、別に」

けるっとした表情で、何の問題もないように答えるセレス。

「あんな、誰のせいで悩んでいると思つてやがる」

そう。姉が来るというだけなら、たいした問題ではない。

だが、セレスのことをどう説明するかだ。幻獣がどうのこうのと言え、姉は真つ先に咲人の頭の中身を心配するだろうし、女の子と同居しているということを色々と言われる。散々に弄られるに違いない。

そして、何よりもセレスの見た目が明らかに中学生くらいにしか見えないことだ。首輪も装備しているため、色々と誤解を生みかかない。以前、ヤバい性癖を持った輩が捕まったことがあっただけに、色々とマズイのだ。

「ちよつと自意識過剰だと思いますよ。というか、自意識過剰な男つてキモいひぎいいっ！」

この莫迦は少々調子に乗りすぎじゃないだろうか。

やり場のない焦りを抱えながらも、咲人は再びセレスの頬を引っ張った。

第6話 最初の晩餐（後書き）

星座カーストとか、今の子は解るんだろうか。

ちなみに、自分は天秤座です。ヨードとかいうな。

アグレッシブでエレガントな……のくだりが解った人とは友達になれそう。

自分はトラ エースのゲーム結構好きなんですよ。

あ、聞いてませんね。すみません。

ひとまず、第一章が終わった感じです。

出会いみたいなのを描きたかったんですが、どうもいまいち……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4010p/>

Beast Tamer

2011年7月30日03時23分発行